

## 「サマリヤの女」

ヨハネの福音書 4:1~18

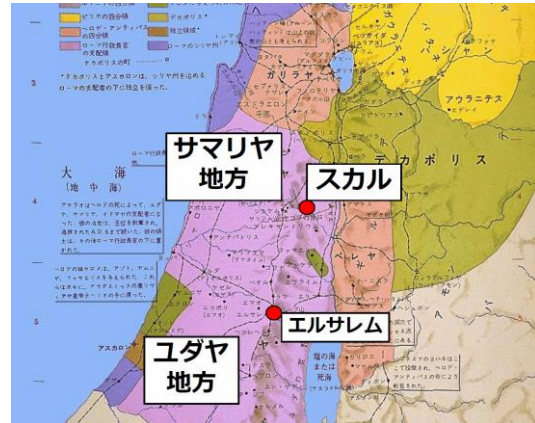
### 1. サマリヤへ

4:1 イエスがヨハネよりも弟子を多くつくって、バプテスマを授けていることがパリサイ人の耳に入った。それを主が知られたとき、

4:2 ——イエスご自身はバプテスマを授けておられたのではなく、弟子たちであったが——

4:3 主はユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。

4:4 しかし、サマリヤを通って行かなければならなかった。



イエシュアは、なぜサマリヤに行かなければならなかったのでしょうか。「あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。」と言ったバプテスマのヨハネの言葉の通りに、イエシュアは、ヨハネよりも多くの弟子を持つようになった、その直後の出来事でした。そして「私のあとから来られる方 (1:27)」と同じくヨハネが言った通り、3:23 で先にユダヤからサマリヤ地方に移動していたヨハネの後を追うように、イエシュアはユダヤ地方からサマリヤ地方に行かれます。この一連の行動は、バプテスマのヨハネの語った言葉が成就する、すなわち真実なものであることを示すものであったと考えられます。ちなみにイエシュアのここまでの動きはエルサレムからユダヤ、そしてサマリヤです。そしてイエシュアのあとに来られる方、聖霊も同じ動きをします。

聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」(使徒 1:8)

聖霊がというよりも、聖霊を受けたイエシュアの弟子たちのことですが、この不思議な一致は、ヨハネすなわち旧約の預言者、女から生まれた者で最もすぐれた者と呼ばれたヨハネも、メシアであるイエシュアも、そして聖霊すなわち聖霊に満たされたイエシュアの弟子たちも、全く同じ目的、計画のために、同じ神様から遣わされている存在であり、その働きであることを示していると考えられます。

### 2. エデンの人

4:5 それで主は、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近いスカルというサマリヤの町に来られた。

スカル (סְכֻרָּה) という地名は、サーハル (סָחַר) 「閉ざされる、封じられる」という意味の言葉が語源であると考えられます。この言葉の語源となる内容、すなわち聖書で最初に使われた出来事が創世記 8 章に記されています。

また、大いなる水の源と天の水門が閉ざされ、天からの大雨が、とどめられた。(創世記 8:2)



これはノアの洪水が 150 日後に終わり、神様の裁きが終わり、新しい地、新しい時代の幕開けを意味するみことばです。イエシュアがこのスカルを訪れた意味は、メシアであるイエシュアによって新しい地、新しい時代が起こされることを意味していると考えられます。そしてサマリヤ (שמרון) という地名には、シャーマル (שמר) 「守る、見張る」という意味の言葉が隠されており、この語源は、創世記 2 章の記述に由来します。



神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。(創世記 2:15)

神様のご計画とは、ノアの洪水に表されたように、神様を信じない、受け入れない者たちを滅ぼし、神様を信じる者たちによって構成された神様の国、御国を築くことです。それは新しい時代であると同時に、創世記に記されたエデンの園の回復でもあります。かつてのアダム、そしてエバがそうであったように、神様がエデンの園に置くべき人を求めて、イエシュアを地上に遣わされたということを示すためにサマリヤ、すなわちシャーマルのスカル、すなわちサーハルという場所を訪れたと考えられます。

### 3. ユダヤ人とサマリヤ人

4:6 そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた。時は第六時ごろであった。

4:7 ひとりのサマリヤの女が水をくみに来た。イエスは「わたしに水を飲ませてください」と言われた。

4:8 弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた。

時は六時ごろ、これは私たちの時間では昼の 12 時ごろですが、後にイエシュアが十字架にかかれる時間です。イエシュアはこの時、旅に疲れておられました。そしてのどに渴きを覚え、空腹でもありました。つまり苦しんでおられたのです。そして弟子たちはイエシュアのそばにいなかったというこの状況は、まさに十字架の出来事を彷彿とさせる内容です。そしてそこにやって来る一人の女性、彼女はサマリヤ人です。サマリヤはシャーマル、神様の国、回復したエデンの園に置く人を意味していると先ほど申しました。つまり、イエシュアの十字架の御業とは、エデンの園、神様の国、御国に人を置くためのものであることを表していると考えられます。

4:9 そこで、そのサマリヤの女は言った。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」——ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである——

なぜユダヤ人とサマリヤ人は仲が悪いのかを見てみましょう。それは紀元前 722 年にイスラエル王国が北と

南に分裂し、その後にアッシリヤ帝国によって北イスラエル王国が滅ぼされた時代に起因します。北イスラエルを滅ぼしたアッシリヤは、多くのイスラエル人たちを捕虜として捕え、結果的に世界中に離散させました。そして民のなくなった北イスラエルの国土に何をしたかが列王記Ⅱ17章に記されています。

## Ⅱ列王記

17:24 アッシリヤの王は、バビロン、クテ、アワ、ハマテ、そして、セファルワイムから人々を連れて来て、イスラエルの人々の代わりにサマリヤの町々に住ませた。それで、彼らは、サマリヤを占領して、その町々に住んだ。

これは当時の侵略戦争の戦略です。戦争で最も恐ろしいのは報復、復讐されることです。ですからただその国や土地を占領するだけでなく、そこに住んでいる民族ごと入れ替えてしまうのです。こうすることで北イスラエルは国として報復することも反乱を起こすこともそして国を再興することもできなくなりました。しかしここで問題が発生します。

17:25 彼らがそこに住み始めたとき、彼らは主を恐れなかったので、主は彼らのうちに獅子を送られた。獅子は彼らの幾人かを殺した。

17:26 そこで、彼らはアッシリヤの王に報告して言った。「あなたがサマリヤの町々に移した諸国の民は、この国の神に関するならわしを知りません。それで、神が彼らのうちに獅子を送りました。今、獅子が彼らを殺しています。彼らがこの国の神に関するならわしを知らないからです。」

17:27 そこで、アッシリヤの王は命じて言った。「あなたがたがそこから捕らえ移した祭司のひとりを、そこに連れて行きなさい。行かせて、そこに住ませ、その国の神に関するならわしを教えさせなさい。」

17:28 こうして、サマリヤから捕らえ移された祭司のひとりが来て、ベテルに住み、どのようにして主を礼拝するかを教えた。

つまり主の祭司が、イスラエルの神について異邦人に教えたのです。こうしてサマリヤの町々、すなわち北イスラエルに移住してきた異邦人たちは、イスラエルの神である主を礼拝するようになりました。しかし異邦人である彼らは、自分たちがそれまで崇拝していた神々を捨てたというわけではありませんでした。

17:29 しかし、それぞれの民は、めいめい自分たちの神々を造り、サマリヤ人が造った高き所の宮にそれを安置した。それぞれの民は自分たちの住んでいる町々でそのようにした。

17:30 バビロンの人々はスコテ・ベノテを造り、クテの人々はネレガルを造り、ハマテの人々はアシマを造り、

17:31 アワ人はニブハズとタルタクを造り、セファルワイム人はセファルワイムの神々アデラメレクとアナメレクとに自分たちの子どもを火で焼いてささげた。

17:33 彼らは主を礼拝しながら、同時に、自分たちがそこから移された諸国の民のならわしに従って、自分たちの神々にも仕えていた。

17:34 彼らは今日まで、最初のならわしのとおりに行っている。彼らは主を恐れているのではなく、主が、

その名をイスラエルと名づけたヤコブの子らに命じたおきてや、定めや、律法や、命令のとおりに行っているのではない。

イスラエルの神を信じる、礼拝する。しかし他の神々も同じように信じる、礼拝する。それがサマリヤ人でした。イスラエルの神はただひとり、唯一の神、他に神々があってはならないのです。ですからユダヤ人は、たとえ同じ神を信じる民であったとしても、このようなサマリヤ人を、その考え方を受け入れるわけにはいかなかったのです。

#### 4. 水

ユダヤ人とサマリヤ人の関係が解ったところで話を本筋に戻します。ユダヤ人であるイエシュアは、サマリヤ人の女性に「水」を求めました。水は創世記 1:2 によれば、地が形もなく茫漠として何もなかった時に、すでに存在していました。すなわち天地創造の前、地の基が据えられる以前からあったものです。その水を、イエシュアはサマリヤ人の女性に求めました。その意味が、サマリヤの語源、シャーマル (שמר) を構成するヘブル文字の中に秘められています。

シーン(ש)…歯を象った文字です。歯で噛む、味わうという概念から、身に着く、身体、形づくるという意味があります。

メム(מ)…水を象った文字です。創世記 1:2 から、水は永遠を意味しています。

レーシュ(ר)…頭を象った文字です。かしら、思考、考え、計画を意味しています。



これら三つの意味を組み合わせると、「水を味わう計画」また「永遠の昔から形づくられる計画」という二つのメッセージが浮かび上がってきます。イエシュアの「水を飲ませてください」と言われたその意味がここにあります。そしてその計画とは、永遠の昔、天地創造の前に計画され、やがて現実となって、形となって現れ、それは永遠に存在し続けるものであることがこのサマリヤ、シャーマルに示されたメッセージであると考えられます。そしてもう一度言いますが、シャーマルは「守る、見張る」という意味で、それはエデンの園に置かれる、つまり神の国に入れられる人を示していることも、神様のご計画を表す重要な要素だと言えます。

私たち日本人にはなかなか理解しにくいことですが、イスラエルのような雨の少ない環境に住む人にとって、水はお金や宝石よりも価値を持つものです。しかしそれは通常飲み水として、これがなければ今のこの肉体を維持することができないという理由としての生命の水です。しかしこのようにサマリヤ、シャーマルの持つ概念で水を捉えるならば、それは神様のご計画においてなくてはならないものであり、同時に私たち人間が救われる、すなわち回復したエデンの園、神の国、御国に入るためになくてはならないものであることが解ります。

4:10 イエスは答えて言われた。「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょう。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょう。」

神の賜物とは、その人すなわちイエシュアを通してのみ与えられる生ける水です。水が天地創造の前から永遠

に存在していたことから、生ける水とは永遠の命を指す言葉と考えられます。

## 5. 父ヤコブ

4:11 彼女は言った。「先生。あなたはくむ物を持っておいでにならず、この井戸は深いのです。その生ける水をどこから手にお入れになるのですか。」

4:12 あなたは、私たちの父ヤコブよりも偉いのでしょうか。ヤコブは私たちにこの井戸を与え、彼自身も、彼の子たちも家畜も、この井戸から飲んだのです。」

先ほども述べましたが、サマリヤ人はイスラエルの神も他の神々も拝む異邦人でした。しかしこの女性はヤコブを父と呼んでいます。しかも「私たちの父」と呼んでいますから、自分はヤコブすなわちアブラハム、イサク、ヤコブを先祖とする、イスラエルの民であることを自覚している者たちが、このサマリヤ、スカルという町には複数いたことが解ります。サマリヤ人は血筋、血統的にはイスラエル人、ユダヤ人ではなく異邦人です。しかしイスラエルの系図の中には、異邦人でありながらそこに名を記されている者が幾人かいます。その代表格がルツという女性です。彼女はモアブ人でした。しかし彼女は、イスラエル人である姑のナオミにこう言いました。

ルツは言った。…あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。(ルツ 1:16)



そしてルツは故郷であるモアブのすべてを捨て、ナオミと共にイスラエルに生きる者となったのです。この言葉、この決意、この生き様がモアブ人すなわち異邦人のルツを、あのダビデ、そしてイエシュアへの系図に名を記されるイスラエル人に変えました。ですからこのサマリヤ人の女性も、ルツと同じ決意をしていたと考えられます。でなければそもそもイエシュアが何を言おうと彼女は答えるどころか、そばに行くことさえしなかったはずで、それほどまでに本来ユダヤ人とサマリヤ人は仲が悪かったからです。

## 6. 世界の基の置かれる前から

4:13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでも、また渇きます。」

4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」

4:15 女はイエスに言った。「先生。私が渇くことがなく、もうここまできみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」

決して渇くことのない、人のうちで泉となって、永遠のいのちへの水がわき出る…頭に思い描くことが、イメージすることができるのでしょうか？ そんな非現実的な、非常識的な、非科学的なことがあるのでしょうか？ しかし彼女は、このサマリヤ人の女性は、頭に思い描くこともできないようなこの言葉を信じたのです。そして求めたのです。ただイエシュアが永遠のいのちとしての水について語られたのに対し、彼女は飲み水と誤解して



しまったようですが、とにかくイエシュアのことを聞き、それを信じ、そして求めたのです。ここに神様を信じる者の、イエシュアを受け入れることができる者の不思議があります。なぜ信じることができるのでしょうか？見たわけでも、理解できたわけでもないのに、なぜこのような言葉を受け入れることができるのでしょうか？その理由もまた、この水というものに表されていると考えられます。

地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた。(創世記 1:2)

地には形がなく、まだ何もなかった頃、すでに水は神様の下に、神様の霊に包まれ、神様と共にありました。すなわちこういうことです。

すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼（イエシュア）にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。(エペソ 1:4)

人が神様に対する信仰を持つ、イエシュアのことを信じて受け入れることは、世界の基の置かれる前からすでに神様によって定められたことなのです。

## 7. 夫

4:16 イエスは彼女に言われた。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」

4:17 女は答えて言った。「私には夫はありません。」イエスは言われた。「私には夫がないというのは、もっともです。」

4:18 あなたには夫が五人あったが、今あなたといっしょにいるのは、あなたの夫ではないからです。あなたが言ったことはほんとうです。」

かつて 5 人の夫を持ち、そして今ともに暮らしている人は夫ではない。これはまさにサマリヤの現状を表す型です。先ほど列王記Ⅱ 17 章からサマリヤ人の経緯について述べましたが、そこに 5 人の夫の名が記されています。

### Ⅱ 列王

17:24 アッシリアの王は、バビロン、クテ、アワ、ハマテ、そして、セファルワイムから人々を連れて来て、イスラエルの人々の代わりにサマリヤの町々に住ませた。それで、彼らは、サマリヤを占領して、その町々に住んだ。

17:30 バビロンの人々はスコテ・ベノテを造り、クテの人々はネレガルを造り、ハマテの人々はアシマを造り、

17:31 アワ人はニブハズとタルタクを造り、セファルワイム人はセファルワイムの神々アデラメレクとアナメレクとに自分たちの子どもを火で焼いてささげた。

バビロン、クテ、アワ、ハマテ、セファルワイム、これらの 5 つの異邦人たちが、サマリヤに持ち込んだ異教の神々が 5 人の夫を象徴するものと考えられます。聖書において神を信じる、崇拝することは結婚に例えら

れます。ですから偶像礼拝は姦淫つまり不倫というような表現で呼ばれるのです。しかしこのサマリヤの女性は、「夫が五人あったが今は…」とあるように、かつてはそうだったが今は違うとイエシュアは言われました。つまりサマリヤ人は、これらの異教の神々をすべて捨て去ったことが解ります。

では今彼女と一緒にいるのは一体誰なのでしょう？共に暮らしてはいるが夫ではない、つまりまだ夫になっていない、夫として機能していないのです。これはイスラエルの神である主、唯一まことの神を表しています。なぜなら彼女は「私たちの父ヤコブ」、つまり自分をアブラハム、イサク、ヤコブの子孫だと言っているからです。かつての異教の神々を捨て去り、今はルツのように「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です」となっているからです。しかし、たとえイスラエルの神を信じていると言っても、夫ではない、つまり夫婦としての関係がないことをイエシュアは指摘されました。夫婦とは交わり、知り知られる関係です。それが全く途絶えているのです。

このように、異教の神々とは縁を切り、イスラエルの神に立ち返ったものの、それについての正しい認識も知識もない、むしろ誤った教えや理解が横行している、そんなサマリヤ人たちの現状が、このサマリヤの女性の中に表されていると考えられます。

## 8. 選び

しかし、たとえ知識がなかろうが間違っていようが、サマリヤ人だろうが何人だろうが、アブラハム、イサク、ヤコブを父と呼び、その子孫を自分の民とする者を、神様は絶対に見捨てない、放ってはおかないのです。それが神様がアブラハムと交わした約束だからです。

### 創世記

12:1 主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。

12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

異邦人でありながら、ユダヤ人に忌み嫌われるサマリヤ人でありながら、ヤコブを自分の父とした、すなわちヤコブの父イサクの父「アブラハムを祝福する者」となった者を神様は祝福されます。生ける水、永遠のいのちをお与えになります。これが 4:4 にあった「サマリヤを通って行かなければならなかった」最大の理由です。そしてこれは 4:7 と 4:10「わたしに水を飲ませてください」とあるように、イエシュアがすなわち神様の方から求めておられることなのです。つまりすべては神様の主権による選びであり、任命であり、神様のご計画の完成、すなわち神の国、御国にあります。そしてそれは私たちにとって決して不利益なものではなく、むしろ祝福です。

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。(ヨハネ 15:16)

どんな願いも叶う世界、それが御国です。あなたは何を願いますか。何がしたいですか。それがすべて与えられる世界に思いを馳せ、思い巡らし、その訪れを心から待ち望み、希望に満たされて今日という日を歩みましょう。